

どうして日本人の抑制された美質は直立しないのか

どんな体験であれ、それが自分の手にあまるイヤな出来事であればあるほど、忘れてはならない、と口を酸っぱくして言わなければなりません。辛ければ辛いほど、その辛さを我が身に刻み込んで、二度と同じことを繰り返さないためにも、自分たちの油断や傲りを戒めて、辛い記憶を引き受けて生きていかねばなりません。一時的な生命の避難として忘れることがありうるとしても、忘れっぱなしでいることは、私たちの精神の武装解除にほかなりません。

地震国に住む私たちは、自然災害に繰り返し襲われる日々を過ごすなかで、イヤなことを忘れてやり過ごす習性を培ってきました。その習性は社会の発展のために、忘れることが非常に都合のよい知恵にまで高められてきたようなところがあります。“水に流す”という言葉があるように、良い意味でも悪い意味でも、私たちの社会は、“水に流す”ことを生きていく知恵のようにしてまわってきました。実際、こんな小さな島国で生きようとするなら、水に流さないとやって行けないというニュアンスが、その言葉には付きまっています。しかし、今回の大津波を想起するかもしれないので気が引けますが、本当は“水に流す”のではなく、水に流されてきたのです。

日本以外の海外で、過去を清算することを“水に流す”という言葉で言い表す社会があるのかどうかは知りません。過去を清算するのは水ではなく、私たちであるのに、日本では私たちではなく、水が過去を流してくれるのです。海外には“水に流す”という言葉がないとすれば、それは、誰でもない、自分たちが過去を清算するという当事者意識があるからだと考えられます。日本では“水に流す”という言葉で当事者意識まで棚上げしているのではないのでしょうか。巨大な自然の猛威の前ではなすすべもないということで、自分たちを無力に追いやっているように感じられます。

水という言葉から、水害にたえず悩まされてきた日本人が諦めの境地に至っていることが感じ取れますが、同時に、本当は日本人も水に流されて生きていくようなことはしたくないけれども、そうせざるをえないという気持をその言葉に込めて、慣用句として日常生活で使っていることも読みとれます。いずれであれ、日本人が“水に流す”、“水に流される”生活を自然のように送りつづけることは、為政者にとっては非常に好都合であることは明白です。“水に流される”スピードのなかで、長期的な視野を持たない政治がおこなえるからです。

いうまでもなく水に流されて忘れたほうがよいことと、忘れてはならないことがあります。味噌も糞も一緒くたにして忘れてしまっただけではいいはずがありません。日本人の集団の記憶として忘れてはならないことまで水に流されてしまえば、日本人の歴史を作り出す当事者意識まで水に流されてしまうこととなります。1年前の出来事が遠くの昔の出来事のように感じられるのは、水に流されるスピードに乗って忘れていっているからであり、半世紀以上前の出来事が昨日の出来事のように自分に密着しているためには、水に流されるスピードに抗して、記憶をしっかりと手放さないようにしなければなりません。

阪神・淡路大震災や今回の東日本大震災にあらわれた日本人の抑制した振る舞いの美質が、日本人の“水に流される”習性と密接につながっていると思われてなりません。“水に流される”習性もま

た、日本人には美質とみなされているからです。「危機管理」がいつも叫ばれながら、「危機意識」が育たないのも、個々人の内に深く仕舞われていく日本人の慎み深い振る舞いがどうしても「危機意識」には向かわず、「危機意識」をも水に流してしまうからでしょう。テレビで繰り返される「がんばれ、ニッポン」の応援も、具体的な復興戦略の見通しのなさを逆に浮き彫りにしているように聞こえます。

日本人の慎み深い振る舞いの美質は、腹の底からの憤りを伴っていません。憤りをかかえこんでいない美質なのです。天災にむかって憤っても仕方がないということではなく、天災が人災を引き起こしていることへの憤りが突き上がってこないのです。憤ることがみえてこない美質だからこそ、人災に的確に対処できない政府幹部はその国民の美質につけ込み、甘えて、情報統制だけは抜かりなく、言質を取られないように神経を尖らせながら、口舌の争いには長けている弁護士出身の官房長官の「直ちに健康に被害は及ぼさない」と繰り返す、国民を愚弄した言葉が立て板に水を流すように押し出されてくるのです。

これは非常に卑怯な物言いです。放射性物質については「直ちに健康に被害は及ぼさない」が、後々に「健康に被害は及ぼさない」わけではないということとをさりげなく言っているだけでなく、同時に後々に健康に被害を及ぼすかもしれないということは、政府としては国民にきちんと説明したという逃げ道を用意しているからです。その物言いには、「健康に被害は及ぼさない」ために、自分たち政府の閣僚たちはどのような手立ても具体的に講じていないという責任の隠蔽もみられます。国民が聞きたいのは、そんな曖昧で責任逃れの言葉ではなく、健康に被害が及ぶ危険がどのように具体的に迫っているのか、であって、いまは大丈夫かどうか、をはっきりと説明してもらいたいのです。

被災地の野菜や原乳の出荷を停止する一方で、「(食べても)直ちに人体に危険はない」と言っていることも、同じ卑怯さです。翌日その件を問われて、「保守的な厳しい基準を守っての出荷停止だ。逆に言えば、市場にあるものは完全に安心だということだ」と述べましたが、「完全に安心」なら、政府は風評を押さえ込むためにも、出荷停止などしてはならなかったのです。出荷の責任は政府が取る、と断固言っただけならばよかったです。トップとしての覚悟もなく、責任回避ばかりを目論んでいるから、こんな卑怯な言葉が次々と押しだされてくるのです。

しかし、日本人の美質は、政府や東電トップの言葉や姿勢に憤りとしてけっして向かいません。敗戦濃厚な戦争末期に玉砕とか転進とかの言葉で国民は欺かれてきましたが、今回も「協力会社」という不都合な真実を押し隠す言葉がメディアで流布されています。これまでは下請け、孫請け、ひ孫請け会社だったのに、いかにも口当たりのよい言葉で問題が隠蔽されているのです。原発現場で命がけ(菅首相は「全身全霊命がけで」と安全地帯からいつも叫んでいます)に従事している作業員たちは、おそらく全員が「協力会社」の社員で、東電社員は全員安全地帯に避難しているのですが、この事実は、作業員たちが普段から原発の一番危険な作業を担当していたために、あえて残ったことと、「協力会社」としての立場上の弱さを浮かび上がらせているにちがいません。

社会が腐っていくとき、いつも言葉から腐っていきます。「協力会社」なるふざけた言葉はその大いなる兆候です。この言葉に衝突しない学者や知識人、文学者は目を閉ざしているのでしょう。内外から賞賛される日本人の抑制された美質と、言葉が腐りつつある社会の進行とが同時にあるということが、今回の大震災の大きな特徴と思われる。